

2022.6  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とみやま やく 富 薬

6号

第44巻  
No.395



ヘンルーダ *Ruta graveolens* L. (ミカン科 *Rutaceae*)

**生薬** ヘンルーダ 夏の開花時期に地上部を刈り取り、陽乾する。

**成分** 精油 :methylnonylketone, methylheptylketone, pinene, cineole、アルカロイド:arborinine, fagarine, kokusaginine、フラボノイド:rutin、フロクマリン類:bergapten, chalepensin 等。

**効能** 駆風、通経、消炎、利尿、解毒作用などがあり、ヨーロッパではリウマチ、腹痛、呼吸困難、肋膜炎、関節痛、月経不順、ヒステリー症に用いる。湿疹、打ち身、捻挫、腰痛に外用する。



生薬 ヘンルーダ

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



地中海沿岸原産で日当たりのよい乾燥地を好む常緑の多年草。茎は直立し高さ50-90cm、下部は木質となり、全体に強臭があります。葉は灰緑色で、互生、2-3回羽状に深裂し、裂片は先端が丸くなったへら状でいくつにも細かく分かれます。夏に茎の頂点から花茎を伸ばし、1.5-2cmの黄色い花を多数咲かせます。蒴果は4-5室で表面に多くの油点があります。変種にヨーロッパ南部原産のコヘンルーダ (var. *bracteosa*) があります。名前の通り草丈30cm位で、葉は1-2回羽状複葉で軟らかく密に互生します。側片の裂片はへら状を呈します。全株に強い臭いがあり、初夏に茎先に黄色の集散花序を開くところはヘンルーダと同じですが、花卉の縁に毛状の細かい切れ込みがあります。

『新約聖書のルカ伝』(1世紀頃)に「ミント (*Mentha* L.) やルーやあらゆるハーブ」という一文があり、古代ローマでは魔除けとして身につけ、中世の疫病時代にはこれを撒き、チフスの感染を予防したと伝えられています。「恵み草」の別名は日曜日の教会で牧師が聖水をこの草で振りかけたことに由来すると言われていています。また英名ルー (rue) は悔恨・悲嘆の意味があることから悔悟の象徴ともされています。

薬としても古代から重要な植物で、ディオスコリデス (40-90) の『薬物誌』には、「Peganon to Kepaion」の名で「山地に生育する野生のヘンルーダは栽培されているものよりも刺激が強く、食用には適さない。栽培種のうちで、イチジク (*Ficus carica*) のそばに生えるものが、最も食用に適する。いずれも焼灼性があり、暖める作用、潰瘍化の作用、また利尿作用がある。また通経作用があり、食べるか飲むかすると下痢を止める」とあり、他に解毒剤や腹部痙痛を和らげ、胸側の痛み、呼吸困難、咳、肺の炎症、腰や関節の痛み、周期的な悪寒にもよいと言っています。また関節の痛みや皮下水腫、出血や鼻血、睾丸の炎症、発疹、丹毒、ヘルペス、頭部膿疱疹に外用するなど多くの薬効や使い方が記され、重要な薬用植物であったことが分かります。ローマのプリニウス (23-79) の『博物誌』の「植物編」には「ヘンルーダもまた、西風の頃と、秋分のあとに種子が播かれる。ヘンルーダは冬の寒さと湿気と肥料を嫌い、日当たりのよい乾燥した土地で、できるだけ煉瓦用粘土を含んだ土地を好む。養分としては灰を好むが、灰はまた、毛虫を除くために種子と混ぜる。…ヘンルーダはイチジクとの相性がよく、どこよりも、この木の下でよく育つ。苗からでも栽培され、穴をあけたソラマメ (*Vicia faba*) に挿し入れるとよい。そのソラマメは、苗を支え、水分を与える。ヘンルーダそのものからも栽培される。すなわち、枝の先端が曲げられて地面につくと、すぐ根が出る」と栽培法について記し、「植物薬劑篇」には多くの薬効と使い方が記されています。

現在日本や中国ではヘンルーダに「芸香」の漢名を与えています。中国の本草書『本草綱目拾遺』(1871)には「芸香草」の名でヘンルーダを掲載しています。日本では『大和本草』(1709)に「芸草」と「ヘンレウタ」を別項目に挙げ、「ヘンレウタ近年紅夷より来る。是紅夷ルウタなり。紅夷人は是を用いて食品に加え、其の香気を助け、他に食の悪臭を去ること日本人の山椒の葉を用いるが如し」と説明しています。しかし、『和蘭薬鏡』(1728)には「芸香 ヘンルーダ (花戸の名)、ルータ・ガラヘオレンス (羅) ウェインルイト (蘭)」と、また『本草綱目啓蒙』(1803)には「芸香ヘンルーダ、蜜種なり。花戸に多し」とあり、これ以降芸香とヘンルーダが同一のものとして扱われるようになりました。これら江戸期に渡った種は先に述べたコヘンルーダであって、ヘンルーダは明治初年に導入されたと言われていています。現在両者ともに栽培されていますが、おもにヘンルーダを多く見かけます。(村上守一 記)